



Data	2024-36
監督:	マルコ・ベロッキオ
脚本:	マルコ・ベロッキオ/スザンナ・ニッキヤレツリ
出演:	パオロ・ピエロボン/ファウスト・ルッツ/アレジ/バルバラ・ロンキ/エネア・サラ/レオナルド・マルテーゼ

みどころ

“金一族”が3代にわたって支配する北朝鮮による横田めぐみさんたちの拉致事件は今や最終局面を迎えているが、“統一国家イタリア”が誕生する直前の1858年にボローニャのユダヤ人居住地区で起きたのが、エドガルド・モルターラ拉致事件だ。

スティーヴン・スピルバーグ監督が映画化を切望しながら、主人公になるべき7歳の少年役を発掘できなかったために断念した、そんな「イタリア史上最大級の波紋を呼んだ衝撃の史実」をイタリアの巨匠マルコ・ベッキオ監督が映画化！

これは必見だが、宗教心が薄く、キリスト教とユダヤ教の異同すらよくわからない日本人には、本作はチョー難解だ。モーゼの「十戒」やキリスト教の「洗礼」程度は勉強の上、「ある少年の数奇な運命」をしっかりと考えたい。

■イタリアの巨匠に注目！今回は何をテーマに？■

世界各国には“巨匠”と呼ばれる監督がたくさん存在する。日本のそれは黒澤明や小津安二郎だが、イタリアのそれは『ラストエンペラー』(87年)のベルナルド・ベルトリッチや本作のマルコ・ベロッキオだ。1939年生まれの彼の代表作は『夜よ、こんにちは』(03年)、『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』(09年)等だが、近時は『甘き人生』(16年)、『シチリアーノ 裏切りの美学』(19年)等も撮っているからすごい。

もっとも、そんなイタリアの巨匠の作品を私が現実に鑑賞したのは、『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』(『シネマ26』79頁) だけだが、その迫力は素晴らしかった。『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』や『シチリアーノ 裏切りの美学』という邦題を見れば、それだけでこれらの作品がイタリアを舞台とした一大歴史ドラマだということがわかるが、

『エドガルド・モルターラ ある少年の数奇な運命』と題された本作は一体ナニ？エドガルド・モルターラって一体誰？私は全く知らない人物だが、「ある少年の数奇な運命」というサブタイトルを見れば何となく・・・？

■□■原題は『Rapito』。これは一体何？邦題との異同に注目■□■

邦題を見ただけで本作に興味を抱く日本人は、よほどの“イタリア通”もしくは、よほどの“マルコ・ベロッキオ監督通”だが、邦題だけで意味がわからない時は原題にリサーチするのが常套手段だ。しかして、それを調べると、本作の原題はイタリア語の『Rapito』だが、これって一体何？

パンフレットにある四方田犬彦氏のコラム『少年は拉致された』によれば、

邦題は主人公の名前をそのまま使用しているが、原題は Rapito、直訳するならば「誘拐された」とか「暴力を振る舞われた」、場合によっては「レイプされた」という訳も考えられるほどに強い言葉である。

と書かれている。なるほど、なるほど……。本作のテーマを読み解くについては、その原題と邦題からそのテーマをしっかりと考えたい。

■□■なぜ7歳の少年を拉致？横田めぐみさんとの異同は？■□■

北朝鮮による横田めぐみさんらの拉致問題は、2002年9月の小泉純一郎元総理の突然の北朝鮮訪問によって大きな進展を見せたが、その後は全く動いていない。私は本作冒頭に描かれる、1858年にポーロニャのユダヤ人居住区で教皇直属の兵士たちが突然モルターラ邸に押し入り、枢機卿（フィリッポ・ティーミ）の命令によって当時7歳の息子エドガルド（エネア・サラ）を連れ去ったエルガルド誘拐事件を見て、思わず、横田めぐみさん拉致事件を思い出したが、その異同は・・・？

両者は時代も舞台も全く違うものだから、共通点はほとんどない。唯一の共通点は時の権力者の意向（1つで）で行われたものだということだ。北朝鮮の権力者とは言うまでもなく、北朝鮮労働党の、金日成、金正日、金正恩と続く“金一族”のことだ。それに対して、「統一国家イタリア」が誕生する少し前の、1858年当時のイタリア（ローマ）を支配する権力者は、時の教皇ピウス9世（パオロ・ビエロボン）だったが・・・。

■□■誰がエドガルド役を？あの巨匠はなぜ本作を断念？■□■

横田めぐみさんは拉致された13歳当時の写真が残っているだけだから、それから約70年を経た現在の姿は誰も見たことがない。しかし、エドガルド・モルターラ誘拐事件を映画にするのなら、7歳当時のエドガルドを印象強く演出した上、物語が終結する時点での、大人になった（老人になった？）エドガルド役と対比させる必要があるはずだ。どんな映画でも、子役を演じる俳優を探し出すのは難しいが、本作で7歳の少年エドガルドを演じたのは誰？ちなみに、本作はかねてから映画化に興味を示していたアメリカのステューヴン・スピルバーグ監督が、エドガルド役を演じる俳優を見つけられなかったために頓挫し

たことを受けて、イタリアのマルコ・ベロッキオ氏が名乗りをあげ、やっと実現できたそう
うだ。

本作についてのそんな製作秘話(?)を知れば、誰が7歳のエドガルド役を演じるのか
に注目したい。そしてまた、誘拐事件が完結した後のストーリーがどんな視点で、どんな
展開をしていくのかにも注目したい。

■イタリアの国家統一と教皇国家の終焉をどう考える?■

マルコ・ベロッキオ監督の『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』は、タイトルだけで
テーマとストーリーが予想できる。また、イタリアのマフィアを描いたフランシス・フォ
ード・ Coppola監督の『ゴッドファーザー (The Godfather)』3部作(72~90年)も難解
ながら、イタリアとアメリカにおけるマフィアの歴史やその攻防戦を興味深く勉強するこ
とができる。しかし、高校時代によほど熱心に「世界史」とりわけヨーロッパ史を勉強し
た人でなければ、19世紀におけるイタリアの国家統一の歴史を知っている人はいないはず
だ。また、もともと宗教心の薄い日本人は、敬虔なクリスチャンを例外として、キリスト
教の教えはもとより、キリスト教とユダヤ教との相違すら知らない人がほとんどだろう。

そもそも、「洗礼」とはナニ?それはどんな儀式に則って行うの?そんなことすらよく知
らない多くの日本人にとっては、ユダヤ人の少年エドガルドが親元から引き離され、ロー
マ教皇ピウスの下に拉致されたのが、エドガルドが赤ん坊の頃に、使用人が無断で洗礼し
たためだ、という設定そのものの理解が難しいだろう。

森繁久彌が長年演じ続けたミュージカル『屋根の上のバイオリン弾き』では、放浪する
貧しいユダヤ人家族たちの姿が感動的に描かれていた。しかし、本作におけるエドガルド
の父親モモロ(ファウスト・ルッソ・アレジ)は、ボローニャのユダヤ人街ではかなりの
地位と財力を持つ有力者らしい。まず冒頭で驚かされるのは、彼の子供の多さだ。日本で
も韓国でも、そして中国でも今や少子化が大問題になっているが、モルターラ家の子供た
ちは、元大阪府知事、元大阪市長橋下徹氏の子供たちとほぼ同じくらい・・・?それなら
ば、一人ぐらいピウス教皇に拉致されてもキリスト教徒として立派な教育を受けながら幸
せに暮らせるのなら、まあそれでもいいか・・・?そんな考え方が成り立たないことは、
エドガルド拉致事件発生後の父親モモロの動きを見れば明らかだ。

さあ、家族の一員として、またユダヤ教徒としてエドガルドを取り戻すためのモモロた
ちの奮闘は如何に?他方、モモロのそんな動きの中、イタリアの国家統一への動きは?さ
らにローマ教皇の権威の失墜ぶりは如何に?

■生みの親より育ての親?キリスト教 vs ユダヤ教の葛藤は■

「親子の絆は絶対」といえば「絶対」だが、他方で、「生みの親より育ての親」という成
句もあるから、どちらが絶対かは実はよくわからない。また、宗教心の薄い日本人には、
キリスト教とイスラム教の対立が全然わからないのと同じように、キリスト教とユダヤ教
の異同や対立についてもよくわからない。そもそも、モーゼの「十戒」はキリスト教の中

でどのような位置づけになっているの？

それすらわからない日本人には、7歳の時に敬虔なユダヤ教徒である両親と兄弟姉妹から拉致され、教皇ピウス9世の下で敬虔なキリスト教徒にさせられようとしているエドガルドの苦悩など、そもそもわかりっこない。しかも教皇ピウス9世がエドガルドを拉致した理由が、ユダヤ教徒の家庭に生まれながら、赤ん坊の時に誰も知らない間に当時の使用人であるアンナ・モリージによって、キリスト教の洗礼を授けられたということだから、当のエドガルドにしてみれば、そりゃ迷惑千万な話だ。

北朝鮮に拉致された横田めぐみさんについては、その所在はもとより、生死すらわからないまま年月が過ぎてきたが、その点、モルターラの場合は全く異なるものだ。すなわち、モルターラの両親は教皇ピウス9世に礼儀を尽くしながら、節目、節目でモルターラと面会することができていたから、その都度、「息子の取り戻し」と「息子の改宗」を願いながら救出活動が続けていた。

他方、7歳の時からそんな両親の姿を見てきたモルターラが、両親の思いとユダヤ教に固執したのは当然だが、そこで「産みの親より育ての親」のことわざ(?)はどう効いてくるの？また、モルターラの心の中での「キリスト教 vs ユダヤ教」の葛藤は？そのありさまは、本作中盤でしっかり確認したい。

■□■ここに注目！死の床での息子と母親との対面は？■□■

本作中盤からラストにかけては、一方で教皇ピウス9世の権力が次第に失われていく歴史的な出来事が次々と提示され、他方でモルターラが次第に敬虔なキリスト教徒に変身していく(かのような)姿が描かれる。そんなモルターラに両親が失望したのは当然だが、怒りをぶちまけたのは、今や“独立支持派”となって教皇ピウス9世の教会に攻め入ってきた兄だ。

7歳の時にキリスト教の洗礼を授けられたという一事のみで、不当に教皇ピウス9世に拉致されたモルターラを救出しなければ！そんな一念で家族は一致団結して頑張ってきたのに、肝心のモルターラは・・・？本作ラストに向けては、イタリアという国家の一大事とモルターラ家族の一大事が同時並行的に描かれていくので、それに注目！！

しかして、本作のラストは、死の床に就いた母親の元をモルターラが訪れ、両者が対面するシークエンスになる。本作については「イタリア映画史上、屈指の冷酷さを誇るエンディング」(MicroMega)とのコメントがあるが、さてその意味は？エリア・カザン監督の名作『エデンの東』(1955年)では、ラストシーンにおける死の床に伏した父親との再会で、ジェームス・ディーンが扮する主人公と父親との“歴史的な和解”が成立していたが、さて本作では？「ある少年の数奇な運命」はあなた自身の目でしっかりと！！

2024(令和6)年5月9日記